

# 移動と音形化の関わり

宮元 創

## 1. 概要

本稿では、*that* 痕跡効果、主語の局所的移動を Sensorimotor (SM) インターフェイスでの認可条件によって捉えなおすことを提案する。

## 2. Kotzoglou (2010)

本稿は Kotzoglou (2010) の分析に基づき、様々な構文を説明するため、2 章では Kotzoglou (2010) を概観する。

(1a) で示されるように、英語では主語から抜き取りすることはできないが、sluicing によって音声的に削除されることで、主語からの抜き取りが容認される。

- (1) a. \*Who did stories about terrify John? (Chomsky (1973: 249))  
b. A biography of one of the Marx brothers is going to be published this year  
    -- guess which! (Merchant (2008: 136))

Kotzoglou (2010) は、(1a) の主語からの抜き取りを SM インターフェイスでの違反に還元する。具体的には、(2) の Restriction on Copy Reduction によって、主語の島を説明する (主語の島と sluicing による島違反の緩和への具体的な説明は Kotzoglou (2010) 参照)。

### (2) Restriction on Copy Reduction (RCR)

それぞれのフェーズの転送領域において、同一コピーによる音声削除は、最大で一つの要素のみにしか適用できない。

- (3) a. \*[phase  $\alpha_1$ ... ~~$\alpha_2$~~ ... ~~$\alpha_3$~~ ]  
b. [phase  $\alpha_1$ ... $\alpha_2$ ... ~~$\alpha_3$~~ ]

(3) では、一つのフェーズ転送領域に同一要素  $\alpha_1$ ,  $\alpha_2$ ,  $\alpha_3$  が存在する。(3a) では、同一コピーの音声削除が  $\alpha_2$  と  $\alpha_3$  の 2 つの要素に適用されているため、RCR 違反によって容認されない。一方、(3b) では、コピーの音声削除は  $\alpha_3$  の 1 つの要素にのみ適用されるため、RCR 違反はなく、容認される。RCR 違反は緩和される方法があり、Kotzoglou は、*pro* の使用もしくは全体の削除といった 2 つの方法によって違反が緩和されることを示している。

### (4) RCR 違反の緩和

- a. *pro* の使用 [phase  $\alpha_1$ ...*pro*... $\alpha_3$ ]  
b. 削除 [phase  $\alpha_1$ ... ~~$\alpha_2$~~ ... ~~$\alpha_3$~~ ]

## 3. 提案

本稿では RCR は他の構文にも拡張でき、SM インターフェイスの観点から様々な構文を説明できるということを提案する。また、Kotzoglou が示した RCR の違反緩和に加え、再述代名詞の使用によって RCR 違反が緩和されることを提案する。

### (5) RCR の違反緩和

- 再述代名詞 (resumptive pronoun: RP) の使用 [phase  $\alpha_1$ ... $\alpha_2$ ...RP]  
[phase  $\alpha_1$ ...RP... $\alpha_3$ ]

RCR と (4), (5) を踏まえ、具体的に *that* 痕跡効果の派生を考察する。

- (6) a. \*Who do you think that saw John?  
b. who do you think [<sub>CP</sub> ~~who~~ [<sub>C</sub> that [<sub>TP</sub> ~~who~~ [<sub>T</sub> [<sub>v\*P</sub> ~~who~~ saw John]]]]]

- (7) a. Chi<sub>i</sub> credi che t<sub>i</sub> ama Sophia Loren?  
    who think-you that loves Sophia Loren

‘Who do you think loves Sophia Loren?’ (Italian: Uriagereka (1988: 245))

- b. chi<sub>i</sub> credi [<sub>CP</sub> chi<sub>i</sub> [<sub>C</sub> che [<sub>TP</sub> *pro* [<sub>T</sub> [<sub>v\*P</sub> chi [<sub>v</sub> ama Sophia Loren]]]]]]]

- (8) a. John said that someone would write a new textbook, but I can't remember  
    who ~~John said that~~ ~~—~~ ~~would write a new textbook.~~

(Kandybowicz (2006: 22))

b. I can't remember who [<sub>TP</sub> ~~John~~ said [<sub>CP</sub> ~~who~~ that [<sub>TP</sub> ~~who~~ would [<sub>VP</sub> ~~who~~ write a new text book]]]]

(9) a. Who did you say that he will come? (Bayer and Salzmann (2013: 294))

b. Who did you say [<sub>CP</sub> ~~who~~ [<sub>C</sub> that [<sub>TP</sub> he [<sub>T</sub> will [<sub>VP</sub> come ~~he~~]]]]]?

(6), (7) は主語からの抜き取りにおいて、英語では *that* が顕在的になると非文法的になり、イタリア語では文法的になることを示している。更に、(8), (9) はそれぞれ sluicing、再述代名詞の挿入によって、*that* 痕跡効果がなくなり、文法的になることを示している。*that* が顕在的に現れる (6b) の派生では、従属節の CP フェーズの転送領域 (TP) において、コピーの音声削除は TP 指定部と v\*P 指定部の 2 つの要素に適用するため、RCR 違反により非適格文になる (*that* が非顕在的である文に関しては、Chomsky (2015) の C-deletion 分析に従う。)。 (7) のイタリア語では、Roberts (2010) に従い、TP 指定部に *pro* があると想定する。従って、(7) では (4a) の方法で RCR 違反を緩和するため、文法的になる。(8), (9) に関して、本稿では sluicing は Merchant (2001) に従い、PF 削除によって派生され、再述代名詞は Kayne (1981) に従い、trace が spell-out された結果、音形化されると想定する。従って、(8b) では (6b) の方法で RCR 違反を緩和するため、(8a) は文法的になる。一方、(9b) では (5) の方法で RCR 違反を緩和するため、文法的になる。

次に、主語の局所的移動を考察する。

(10) a. \*John, *t* left. (Agbayani (2000: 704))

b. [<sub>CP</sub> John [<sub>C</sub> [<sub>TP</sub> ~~John~~ [<sub>T</sub> [<sub>v\*P</sub> ~~John~~ left]]]]]

(11) a. Me/\*I, I like beans. (Schütze (2001: 210))

b. [<sub>CP</sub> Me [<sub>C</sub> [<sub>TP</sub> I [<sub>T</sub> [<sub>v\*P</sub> I like beans]]]]]

(12) a. Gianni telefona  
Gianni calls (Italian: Barbosa (1995: 11))

b. [<sub>CP</sub> Gianni [<sub>C</sub> [<sub>TP</sub> *pro* [<sub>VP</sub> telephone Gianni]]]]]

(13) a. Who watered the plants?  
b. Me. (Merchant (2004: 703))

c. [<sub>FocP</sub> me [<sub>Foc</sub> [<sub>TP</sub> I [<sub>T</sub> [<sub>v\*P</sub> I watered the plants]]]]]

(10) は主語の局所的話題化ができないことを示し、(11) は、主語位置に代名詞を挿入する左方転移が可能であることを示している。更に、(12) は空主語を許す言語の preverbal subject を示し、(13) は、主語が fragment answer になるのが可能であることを示している。本稿では、下の表が示すように、*that* 痕跡効果と同様の方法で、RCR 違反と違反緩和によって、(10)~(13) の文の容認性を捉えることができることを主張する。

音形化との関わり	なし (= (3a))	<i>pro</i> (= (4a))	削除 (= (4b))	再述代名詞 (= (5))
<i>that</i> 痕跡効果	RCR 違反 (= (6a))	RCR 違反緩和 (= (7a))	RCR 違反緩和 (= (8a))	RCR 違反緩和 (= (9a))
主語の局所的話題化・焦点化	RCR 違反 (= (10a))	RCR 違反緩和 (= (12a))	RCR 違反緩和 (= (13a))	RCR 違反緩和 (= (11a))
容認性	不可能	可能	可能	可能

<主要参考文献> Agbayani, Brian (2000) “Wh-Subjects in English and the Vacuous Movement Hypothesis,” *Linguistic Inquiry* 31 (4), 703-713. / Barbosa, P (1995) *Null Subjects*, Doctoral dissertation, MIT. / Kayne, Richards (1981) “ECP extensions,” *Linguistic Inquiry* 12, 93-133. / Kotzoglou, George. (2010) “(Non-)Extraction from Subjects as an Edge Phenomenon,” *The Complementizer Phase: Subjects and Operators*, ed. by Phoevos Panagiotidis, 33-50, Oxford: Oxford University Press. / Merchant, Jason (2001) *The syntax of Silence: Sluicing, islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford. / Merchant, Jason (2004) “Fragments and Ellipsis,” *Linguistics and Philosophy* 27 (6), 661-738. / Schütze, Carson (2001) “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4, 205-238.